道ばたの恋

由城 要

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
道ばたの恋

【Ｎコード】
Ｎ９６５４Ｐ

【作者名】
由城　要

【あらすじ】
道ばたで、ひとりの少年に恋する彼女。
小さな恋の、静かな終わり。

（前書き）

道ばたで、ひとりの少年に恋する彼女。

小さな恋の、静かな終わり。

ほら見て、と耳障りな声が言う。またお腹膨らませて、と汚いものを見るような目でアタシを見る。アタシは足を止めて、こっちを見てる2人の主婦を睨みつけた。ああ、五月蝿いやつら。厚化粧に皺寄せて、今日も井戸端会議。暇って人を醜くするわ。

私は鼻を鳴らしてわざわざ目の前を横切ってやった。非難の目が向けられるけど、気にしない。誰の子だっていいじゃない。二つに割れば半分はアタシの血なんだから。それでも主婦達は口元を隠してヒソヒソ、ヒソヒソ。今日の風も強くて冷たい。

重いお腹を左右に振りながら歩き出すと、太陽は意外にも小春日和の温かさを私に届けてくれた。輪郭をなぞる冷たい風と、頭上から降り注ぐ熱。これが春ってやつなのかもしれない。私は目を細めて、大きく伸びをした。

さてと。今日もアタシには行かなきゃ行けない場所がある。

身重にはちょっと辛い坂を上ると、住宅街の中心に大きな川が現れる。海へと続く、浅くて広い川。もちろん川の水は飲めたものじゃない。色はまるで雨にうたれた水溜まりの色だし、何より魚も住んでないもの。

河原には住宅街とは違う家が立ち並んでいて、近寄ると特有の匂いが漂ってくる。アタシは足早にそこを通り過ぎた。時折話し相手をすることもあるけど、今はそんな気分じゃないわ。

気を取り直して顔を上げると、向こうに目的の人を見つけた。おでこを冷たい風に晒して、膝を抱える学生服。どこも見ていないような目をして、彼は濁った川の水面を見つめている。

彼に近づくと、挨拶代わりに肩を叩いた。彼はふぅ、と溜め息をついてこちらを振り返る。　アタシは彼の名前を知っている。彼は、ユウヤ。どうゆう字を書くかなんて知らなし、一度も呼んだことないけれど。彼は、ユウヤ。一ヶ月前、まだ草木が新緑に染まるより少し前に出会った、少年。

☆

まだアタシの体がもう少し身軽だったころ、この河原でアタシは見慣れない少年の姿に気付いた。車も人も通らなくて、ひなたぼっこするには最高の河原の一画。ある日アタシの昼寝スペースを陣取って丸くなっている人影がいた。真っ黒な学生服には枯れ葉や砂が沢山ついていて、橋の下に集まっている人たちの仲間かと思ったけど、そうじゃなかった。

勿論、アタシはあの手この手を使って抗議した。でも、ユウヤは相手にしてくれなかった。アタシなんか見えていないような目で、ただずっと向こうを見ていた。目の前に広がる青空でも静かな街並でもなくて、ただ何処か遠くを。

アタシはこの縄張りを占拠したユウヤにずっとちょっかいをかけることにした。だって、アタシの大事な昼寝の場所。他の誰も寄せ付けないようにしていたのに、いつの間にか朝から晩まで居座っているんだもの。夜になったらフラフラと何処かへいなくなるけれど、夜になるとここは冷たい風が吹く。だから、昼間じゃないと意味が

ない　。

毎日のように、アタシはユウヤのいるこの場所にきた。知らんぷりを続ける彼の背中を他の場所へ押しやろうとしたり、時にはちょっとした暴力で蹴り飛ばしたり。でもアタシの腕より、この少年の力の方が強かった。てこでも動かないから、仕方なくその隣に座ることに決めた。

ユウヤの隣は、その体が壁になって、冷たい風が吹き付けてこなかった。陽のあたる方に腰を下ろすとあたたかい。アタシはうとうとと、いつの間にかユウヤの隣で眠るのが癖になっていった。

ユウヤが初めてアタシに触れたのは、一緒に河原でひなたぼっこするようになってしばらくしてからだった。今までずっとアタシの存在を無視してたのに、急に頭を撫でられた。眠気に微睡んでいた時だったから、急に意識を引き戻さる不快な感覚に耳が緊張した。うっすらと目を開けると、ユウヤが何かを呟きながら頭を撫でていた。

一瞬だけ体が緊張したけれど、その後は雲に乗るような心地良さだった。ふわふわとした意識の中で、ユウヤが少しだけ笑う。笑った顔を見るのは初めてだった。だからもっと撫でろって意味を込めて、アタシも同じように目を細めた。

☆

あの日から、ユウヤはアタシのちょっかいに応えてくれるようになった。一緒に河原で丸くなって眠って、時には頭を撫でてくれて。

だからアタシもユウヤのところに行くのが日課になっていった。

今日もユウヤはアタシがやってくると、慣れた様子で右手を差し出してきた。なんだかよく分からないあだ名でアタシを呼ぶ。本当は別の名前があるけれど……でも、ユウヤがつけてくれた名前ならそっちの方がいいかもしれない。アタシは呼ばれるままにユウヤの隣に腰を下ろす。

ユウヤは差し出した手とは逆の手に一冊の本を持っていた。読書でもしていたのか、しおりが風に揺れている。そういえば、最近ユウヤはよく本を読んでいる。最初はつまらなそうに目を通していたのに、最近では昼寝するアタシの横で熱心に読書をしていた。

今日は何の本を読んでるの、とアタシは風に揺れるページを覗き込む。ユウヤは困ったように微笑むと本を閉じた。いつもそう、ユウヤはアタシに本を見せてくれない。アタシが汚してしまうとでも思っているの？それともその本、そんなに大事なの？

アタシは少しだけ不満げに背中を向けた。ユウヤは困った顔で頭を撫でてくる。アタシはすねたフリをしながらも、心の底では分かってた。

「……やっと見つけた、不良少年」

ふと耳慣れない声が土手の上から聞こえてきて、アタシもユウヤも顔をあげた。そこに立っていたのは太陽を背にして仁王立ちのセーラー服の少女。黒ぶちの眼鏡から見えるくりくりした目が、ちょっと意地悪そうに笑ってた。

「こーんなところにいたんだ。祐也くん」

「西森！どうして俺の名前……」

ユウヤが驚いたように腰を浮かす。立ち上がって少女に歩み寄る。アタシは2人分の影の中で、残された学生鞄と本を見つめる。少女は腰に手を当ててユウヤの鼻先に小さな紙を押しつけた。

「2年3組秋山祐也くん。『図書館から借りた本の貸し出し期限が過ぎています』」

「あ……」

「もう……。ただでさえあんまり学校来ないのに、私が読みたい本持っていっちゃわないでよ」

溜め息混じりに少女は笑った。ユウヤは、ごめん、と呟いて、さっきまで見ていた本を少女に手渡す。さっきまで熱心に読んでいたのに。アタシは本が少女の手に渡るのを見つめる。満足げに本を手に取った少女に、ユウヤは首を傾げた。

「……でも、そのためだけに？」

「……。……うん、そのためだけに」

少女はちょっとだけ赤くなった頬を隠すように笑うと、足下に寝転んでいるアタシに気付いた。あ、可愛い、と話を逸らすようにアタシに手を伸ばす。眼鏡の奥に見える澄んだ瞳が近づいてきて、アタシの顔を覗き込む。細くて綺麗な両手が慣れた様子で抱き上げてくるから、アタシは抵抗しなかった。

「あ、チャチャ……」

「『チャチャ』っていうの？あ、ちょっと重い……もしかして子供がいるのかな？」

この河原で感じる太陽のようにあたたかい手。身重のアタシを汚いもの扱いするあの人間達とは違う、優しい香り。ユウヤが少女の腕の中に抱かれたアタシの頭を撫でた。優しくて、幸せそうな笑顔。

アタシはぴょん、と少女の手から飛び降りた。着地の動作もちょっとだけ重い。一度だけ振り返ったユウヤと少女は、ちょっと気恥ずかしそうに、そして楽しそうに会話をしていた。アタシはその様子をしっかりと目に焼き付ける。

河原に降り注ぐ光は相変わらずあたたかくて、今日は冷たい風も吹いてこない。遠くから聞こえてくる車の音。水面が太陽に反射して光る。

いつもと変わらない午後。いつもと変わらない青空の下。でもちょっとだけ小さな鼻に何かが滲みて、アタシは初めて……小さく、鳴いた。

Ｆｉｎ.

（後書き）

最後までお付き合いいただき、ありがとうございます。

ファンタジー以外の小説はあまり書かないのでベタベタになりましたが、楽しんでいただけたら嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9654p/

道ばたの恋

2011年1月13日04時32分発行